

佐藤喜代治氏著「国語学概論」

阪 倉 篤 義

古くは龜田次郎氏「国語学概論」から、安藤正次氏「国語学通考」、橋本進吉氏「国語学概論」、東條操氏「国語学新講」、小林好日氏「国語学通論」などをへて最近の諸著に至るまで、国語学を総説した書物の数は十指に余る。重点のおき方に小異はあつても、その多くは国語学なるものの輪郭や方法を説くと共に、併せてその時までの研究成果に基いて、明らかとなつた日本語の諸事実を歴史的に解説するのを常とした。いはゞ国語学の概説と、国語の概説とを兼ねる形のものが多いのであつた。が、今こゝに紹介しようとする佐藤喜代治氏の新著は、後者の面を極度にきりつめて、主として前者即ち国語研究の方法に対して考察を加へることを意図されてゐる。かつて龜田・橋本の二先覚によつて著された同名の書が、方法論的反省に於て、それぞれの時

代に大きな意義を有したに對して、この書物もまた、その後現在に至るまでの国語学の進展をあざやかに反映して美事である。既に国語研究の道に踏み込んだ人達には、自らの方法の反省のために、新しくこの門に入らんとする人達には、この学間の現段階と問題の在り所を知るために、必ず一読をすゝめるべき書物であらう。

ところで、この書物に於て著者は決してたゞに国語学の現段階を綜覽することを以て満足しようとするものではない。「広汎に亘る国語学の諸問題の中、国語が一つの言語として持つ本質に遡つて考へ、その点から国語の基本的構造をなす、意義・文法・音韻、同時に文字について基礎的考察を試みようと思ふ。」(序言)即ち、著者が「自ら調へ自ら考へ」(あとがき)た所に從つて、新しい国語学の体系を樹立しようとする所にその真意の存することを思はなければならぬのである。されば、その前提として、著者はまづソシュニールの社会主義的言語学とマルティの心理主義的言語学とを批判しつゝ、自らの言語本質観、及び、言語研究の基本的態度を明らかにするたために、本書全篇の1/5以上を費してをられる。そして結局「言語には個人的主体的側面と社会的側面とがある。言語研究の直接の対象はあくまで言語活動でなければならぬ。言語活動は主体的実践を伴つてはじめて成立する。しかし主体的実践が可能であるためには、これが成立する條件としての言語記号といふ社会的なものがなければならぬ。言語活動が行はれる場合、そこに支配してゐる法則、それを規制するやうな法則が、実はこの言語記号の本質であり、吾々の研究はこの法則の認識を目的とする」といふ結論に到達されてゐるのである。この立場は勿論本書を一貫して保持され、同じ趣旨の言葉はあちこちに繰返へし述べられてゐる。それならば具体的な問題の処理に當つて、この理論は果してどのやうに生かされて来るであらうか。

例へば第四章 音韻論に於て、次のやうな意味のことが述べられてある。「言語音の研究に於て、直接研究の対象たるべものには常に具体的な音声であつて、單なる音声觀念——個々の発音及び聽音の行爲を離れた音声觀念といったものではない。しかも具体的な音声は必ず音声意図の実現といふ意味を持ち、その音声意図なるものは社会的に一定の秩序を以て統一されてゐる。この秩序法則を見出すのが言語音研究の目的である」(168頁、173頁など)。又かうも言はれる。「現実の音も声の形態は頗る雑多で変化極まりないにしても、現実の現象が複雑なるが故に、そこに理法を求めるところを断念して、それと離れた音声觀念のみを問題とすることは許されない。現実と離れた理念はプラトンのイデアの如きもので、少くも経済科学の埒外にある」(17頁)と。この立言はその限りに於て誠に正しい。たゞこの法則発見のための具体的な対象の処理に際して、複雑な現象の中から「正常の現象と一時的な変異とを區別して取り扱はなければならぬ」(同)と言はれる時、その「正常」と「一時的変異」とを判する基準は一体何

なのであらうか。正しい意味での音声觀念といふものを先づ予定しておいて、それに照らして一時的変異現象と認められるものを切り捨て、さて後に残ったものから、所要の音声觀念を求めるといふのは、循環論に陥る危険がありはしまいか。否それよりも、このやうな取扱ひ方は、やはり結局混質的なランカージュを混質的なまゝで処理することにほならないのではなからうか。著者が「言語研究の対象は、あくまで言語活動そのものでなければならぬ」と言はれる時、われわれはそこにソシュールの言ふ「言の言語学」(原論以下)の展開を期待した。しかし第三章文法論に於ける「我々は最も根本的なものから出発して、その中で最も根本的なものを探し出し、それを基にして全体の秩序を見出さうとした」(11頁)といふ言葉にも見られる如く、著者が取扱はうとされたものは、要するにソシュールがパロール循環の中から平均値として求めたものと同じものではないのだらうか。このラングなるものこそ正に「人が他人を理解し、他人に自己を理解せしめることなす」ところの言語習慣の総体(原論104頁)なの

であるからである。たゞソシュールが「言語の言語学」と「言の言語学」との間に明確な一線を引いて區別しようとする(原論)に對して、著者はたゞ「視点を移動する」ことによつて、兩者を総合的に眺めようとしてきている(56頁)。もと二面性を有する言語の姿ありのまゝに把握する方法として、この態度こそ理想とされなければならぬ。しかし、学問的な処理に當つて、そこには多大の困難が伴ふであらう。「具体的な対象をとらへることと、これを科学的に取り扱ふこととは自ら別の事柄である」(14頁)といふ歎声に似た断り書きを、著者と共に附け加へざるを得ないのである。著者がこのカーテンを勇敢におし開かうとされた努力は尊い。しかしこの書物に表はれてゐる限りに於ては、著者はなほ多分にソシュールの立場に傾いてをられるやうに、私には思はれる。だが軽々しく批判めいた言葉を吐くことを慎しまう。残念なことに、こゝには、書物の性質上、著者自身の新しい見解に基く國語の諸現象の処理が、具体的な形で余り豊富には示されてゐない。われわれは著者が、今後この理論に基いて展開され

る新しい国語学の体系に深い期待をよせ、その成就を心からお祈りしたい。

第二章以下の各論に入つて、意味論・文法論・音韻論・文字論には、それぞれ三十頁乃至六十頁の級面が宛てられてゐる。一般の概論書に見られる音韻論・文字論・意義論（語彙論・文法論）といふ順序は思ひ切つて無視され、しかも右の順序で論述は甚だ調子よく進んで行く。たゞ文字論が事実の叙述に傾いて、文法論や音韻論に比してやゝ手薄さを感じしめるのは、文字論なるものの性質に由来する止むを得ぬ現象なのであらうか。何れにせよ、實は著者に帰せられるべきものではなく、むしろ国語研究における文字論の現状を反映したものと云ふべきであらう。

各論通じて著者は、山田孝雄博士の学説を奉じられてゐる所が多いが——音韻や文字に關聯して当然触れられるべき特殊仮名遣の問題に殆ど言及されないのも、或いはこゝに關係があるのだらうか——、文法論に於て、それは殊に顯著である。従つてまたこゝから時枝誠記博士の言語過程説に基く文法論に、きびしい批判の矢が放たれて

ゐるのであるが、中には著者の誤解に基く批判かと思はれる節も、無くはない。例へば山田博士の喚体句の説明に對して、時枝博士が、

この結論は、文の成立條件を統覚作用に求め、統覚作用の所在を用言に歸した博士の学説の必然的な結論であるに違ひないが、体言と体言の裝定をなす連体格に喚体句の統一があるとするとは、單なる形式的な演繹に過ぎない云々

と述べられたのに對して、著者は「これは連体格を陳述作用を表す述格と混同したものである」として非難されてゐる(107頁)けれども、これは必ずしも當らないやうに思はれる。時枝博士の真意は「本來実在の觀念、屬性の觀念と次元を異にし、主位觀念・實位觀念の外にあるべき統一作用の表現(陳述)が、實位觀念を表現する用言と合體して述格をなすと考へられた、その考へ方の必然的な帰結として、やがてこの喚体句に於ても、同様に、体言とその連体格よりなる呼格——本來実在觀念の表現たるべき語の中に、統一の作用が寓せられるときされるに至つた」ことを言はうとされるので

あつて、少くも「連体格を述格と混同した」点を非難の理由とされたのは、誤解ではあるまいか。しかし勿論この点を別にしても著者は時枝博士の見解に簡単に同じられようとは思へない。山田博士かが沈黙を守られてゐる今、その継承者たる著者が、時枝博士の文の統一作用に就いての老へ方(時枝博士もまたこれを、山田博士の学説の正しい展開であると自負される!)に對して、どのやうな態度をとらうとされるかは、これが文法研究の中心的課題の一つであるだけに甚だ興味ある所であらう。「対象と主体が一体となり、対象に融化した主体が主体としていまだ独立しないところに直観作用の特色が存し、これをそのまゝ一元的に表現することによつて喚体句が成立する(111頁)といふ巧みな説明を、自ら「かゝる心理的考察は当面の問題ではない」と批判される著者は、喚体句に於ける統一機能な、あくまで、文の中心となる体言に見出さうとされるのであるが、こゝには尙、問題が残つてゐようかと思はれる。

こゝ文法論に限つても、当然こゝに触れなければならぬ問題はまだまだ多い。しか

し与へられた紙数は既に起過しやうとしてゐる。たゞ最後に、時枝博士の詞と辞との論に対して、著者が、対象化客観化の最も濃厚なものな一方の極に據ゑ、それが著しく稀薄で、主体的志向作用の最も著しいものを他の極に據ゑて、而も両者を連続の相に於て眺めようとする点に、深い興味と共感とを禁じ得ないことを述べて、この紹介を終らうと思ふ。

小B6版二八〇頁の小型の書物ではある

けれども、その内容は誠に豊富である。しかもここには、事実をありのままに眺めようとする態度が一貫して流れてゐる。それが時に折衷的な印象を与へて人あるいはそこに一種の物足りなさを覚えるかも知れない。しかしやはりこれが言語研究の基本的態度であることを思ふべきであらう。私の読みの浅さが、この好著に不当な批評を下す所があつたのではないかを懼れるのみである。

— 京都大学助教授 —